

2012 年度(平成 24 年度)「世界エイズデー」キャンペーンテーマ・フォーラム報告(第 1 回)

特定非営利活動法人エイズ&ソサエティ研究会議 (JASA) の第 109 回フォーラム Part1 「ここから始まる～2012 年エイズキャンペーンのテーマ策定に向けて」が 2012 年 5 月 9 日午後 6 時半から 8 時まで、JASA および公益財団法人エイズ予防財団の共催フォーラムとして東京・四谷三丁目のねぎし内科診療所多目的室で行われた。参加者は 23 人だった。Part2 は 5 月 18 日 (金) に大阪で開かれる。

■開会あいさつ、趣旨説明 (公益財団法人エイズ予防財団 宮田一雄理事)

平成 24 年度「世界エイズデー」キャンペーンのテーマ策定について経緯と趣旨を説明 (資料 1)。

■エイズ予防情報ネットに寄せられた意見紹介 (公益財団法人エイズ予防財団 柏崎正雄課長代理)

エイズ予防情報ネットを通じ 4 月 16 日 (月) から 5 月 20 日 (日) までキャンペーンテーマに関する意見を募集。9 日までに届いた意見を要約して紹介 (資料 2)。

ディスカッション

■司会・進行 (特定非営利活動法人日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス 長谷川博史代表)
フォーラムの議論はテーマ策定のプロセスに反映させていきたい。テーマとキャッチコピーは、分けて考える必要がある。エイズ対策はどのような課題を抱え、その中でいま取り組まなければならないテーマは何か。まずはそれらを話し合い、情報を共有したい。

■参加者からは以下のような意見が出された。

【取り組むべき課題】

《予防としての治療について》

- ・昨年来、**treatment as prevention** (予防としての治療) が強調される傾向が国際的にも顕著になっている。臨床の現場では、抗レトロウイルス治療を受けている HIV 感染者のパートナーに感染が拡がらないことは以前から分かっている。それが今になってなぜ声高に言われるのか。背景に何があるのか。考える必要がある。
- ・クリニック来訪者にも HIV/エイズに対する誤解がある。話を聞いてみると、自分の性生活、性行動に正面から向きあっていないという背景があるようだ。
 - (予防としての治療について) 抗レトロウイルス治療を継続することで、HIV に感染している人の体内のウイルス量が減少し、性感染のリスクが低くなることが指摘されている。感染者と非感染者のカップルを対象とした大規模臨床試験の中間報告が昨年、公表された。感染者が治療を受けているカップルではパートナーへのリスクが 96%下げられると報告され、治療がもたらす予防効果の具体的なエビデンスが示されたと話題になった。治療の普及が予防にも効果をもたらすことは確かだが、予防対策の手段として治療の効果を過大視することには警戒論も強い。
 - 日本は保健医療基盤が比較的、整っており、治療へのアクセスも良いことが、感染の拡大が低く抑えられてきたことの大きな理由の一つだろう。治療の進歩で HIV/エイズは死なない病気になったといわれるようになり、それなら感染した人は早く治療すればよいという考え方が強まっている。ただし、HIV 感染を過度に軽くとらえることになるとそれまた問題である。
 - 残念ながら HIV/エイズは完全に治せるわけではない。副作用を承知の上で薬剤を使い、大変な思いをしてコントロールしている状態だ。その治療ですら必要な人に届かない国も多い。薬剤耐性の問題もある。根本的な問題が先送りされ、治療だけが声高に言われるのはかなり乱暴ではないか。

《テーマの設定、ターゲットの設定について》

- ・テーマはどこにターゲットをしぼるのか。あちこち欲張り過ぎている印象がある。
 - 以前のテーマはキャンペーンとして展開できるようには設定されていなかった。
 - 厚労省が選ぶテーマにはすべての人を対象に展開できるものを、という設定が必要だろう。
 - みんなに伝えようとする誰にも伝わらないのではないか。
 - 無関心な人にも関心を持ってもらうという議論はもっともらしくはあるが、国内に様々な問題が噴出している現在のような時期には大変だ。エイズよりもっと心配なことがたくさんありますということになってしまいかねない。むしろ、少数ではあっても、HIV/エイズへの関心を持続させている人たちに焦点をあて、その人たちが力づけることができるようなメッセージが有効ではないか。
 - population approach（国民一般を対象とした予防活動）と targeted approach（個別施策層を対象とした予防活動：MSM、性産業従事者とその顧客、若者、外国人、薬物使用者等）の2つの考え方がある。緊急な課題として取り組むべき対象はあるか。対象を絞り込むのか、広く国民全般にアプローチするのか。どちらかが分からない。
 - 過去2年のテーマを見ると、感染している人、していない人の双方に呼びかけている。その根本は変えなくて良いのではないか。両方に訴えかけていかないと意味がないと思う。感染していない人も、している人も、それぞれHIV/エイズを誤解している場合がある。両方の誤解を解いていくようにするのが良いのではないか。
 - 治療の予防効果を強調するあまり、行動変容アプローチなど他の予防手段を否定するかのよう傾向もなしとしない。予防対策を治療だけに頼るのでは、どう考えても費用がかかりすぎる。費用対効果が高い対策とはとてもいえない。
- ・カップルの性に関する相談を受けている。セックスレスに関する相談が多く、未婚の20代～30代男性の7割、女性の6割は恋人がいない。性行動が頻繁な人とそうでない人に二極化している。エイズという言葉が出て、セックスや恋愛をしていない人は自分の人生に全く関係ないと思うのではないか。例えば自分のセックスライフについて考えるなど、視野を広げてHIV/エイズにつなげるアピールはどうだろうか。
 - 性の文化の問題とセックスレスの問題は一見正反対に見えるが、現実感覚（リアリティ）の欠如という点で共通している。どちらも性の問題をきちんと捉えなおす必要性を感じる。
 - ・企業でキャンペーンを実施している。毎年変わらない普遍的なテーマを設定しながら、一方でその年ごとのテーマも決めている。対象をどこに設定するかは非常に重要。自社キャンペーンでは、国民一般を対象にHIV/エイズの正しい知識の習得や予防のメッセージを重視している。一般の人を巻き込んでいくには、ベーシックなことを伝えようとするのも良いのではないか。
 - 長期ないし中期で解決すべき課題と今年解決すべき課題の2つの設定は企業の現場ならではの発想。ターゲットを狭くしぼるより、予防や人権など広く共有できる課題のほうが企業は参加しやすい。
 - ・「HIVと自分」を考える場合、まず感染の可能性があるかどうか、感染したらどうするか、という点がある。福祉の観点からは、HIV陽性者が老いることに介護側が気づいていない現状もある。長期支援が必要な疾病の多くは生活支援の問題が取り残される。感染リスクの有無よりも、HIVが日常の仕事や生活延長線上の文脈に入るきっかけを提供するかたちがよいと思う。感染するか、しないかに過剰にフォーカスするとそこしか見えなくなるのではないか。

《リアリティについて》

- ・「HIVの治療にどれだけの費用がかかるのか」という問いかけができるだろうか。財政が厳しい今、どれくらいの国民の負担があるのか、あえて正面から向き合ってはどうか。「そうだ」という意見と「そこはちょっと違う」という意見、二通りだと思う。
 - 広く医療と予防にかかわる問題であり、エイズだけに特化した発信は誤解を生みかねない。感染の拡大が国民に多額の負担を強いるといった主張が、HIV/エイズに対しリアリティのない人たちに向けて発信することで、感染者バッシングを招くおそれもあるのではないか。感染の高いリスクにさらされている層に向けて発信し、自分たちの問題としてとらえられるようなかたちなら話

は別だが。

→感染が広がってあとで治療に多額の費用をかけるよりは、いま予防に投資したほうが安上がりという話はあるが、表現次第で感染した人を排除するようなメッセージになるおそれもある。

→治療に費用がかかることを強調すると、陽性者が社会から排除される側面がある。

- ・キャンペーンはこうしたほうが伝わるという戦略的な考え方の一つとして、もしかすると財政的な問題の提起があるかもしれないし、エイズ対策関係者へのエンパワーメントを5年間実施するという案もありうるかもしれない。共通のコンセンサスは難しいにしても、本日の議論の中では「誤解」「みんなの問題」「生活の文脈」など大切なキーワードが出てきた。なぜみんなの問題なのか、関心をもてるような切り口を考えたい。感染する・しないだけで考えると一気に関心を持ってない人が増える。HIVがなぜ身近な問題なのか、そこに生活している人がいるといったリアリティをもとに考えていきたい。

→テーマ設定が1年単位でいいのか、長期ないしは中期で国が取り組むべき課題を考えるべきなのか。この3年でキャンペーンらしい動きにまできたからこそ、そうした意見も出てきたのではないか。キャンペーンテーマの枠組みがもっと必要だろう。

→リアリティをどう持てるかが課題であり、共通したキーワードでもある。個別施策層と設定されている人たちの中ですら、リアリティがないのはなぜなのか。

→学生の目が海外のエイズ対策には向いても、国内には向いていない。日本ではエイズの流行が大きな問題と思えないので、リアリティが持てないのではないか。

→統計も信用できないのでは。発表されているデータが本当の数字ではないと思っている人がいる。

→統計の数字よりもむしろ、感染した人が何に困っているかを知る方がリアリティはある。「ただでさえ病気で大変なのに、かつ理解されなくて困っている」といったことの方が共感できるのではないか。

→統計数字はあくまで推計である。不信の原因とはいえない。

→「セックス」と「秘密」という2つのキーワードはどうか。セックスをする人はだれでもHIVに関係がある。人には秘密の1つや2つくらいはある。実際にHIV陽性でなくてもセックスや秘密の話でつながり、意見交換ができる。秘密はあってもよい、セックスを笑わないでほしいといったことがメッセージになりうる。

→自分のセックスをネガティブにとらえていないか。性の文化を捉えなおす必要がある。ただし、セックスを取り上げ、企業のなかで展開できるのかということも考える必要がある。

→つながりが非常に大切。人と人、コトとコトのつながりを見直すこともキーワードではないか。

- ・「エイズデー」で検索するとウィキペディアが出てくる。そこで「エイズ撲滅」ということばが出てくる。「撲滅」ということばはHIV陽性者の排除になりかねない。

→病気に対応しようと言うときに、「撲滅」という発想はそもそもあわない。そうした共通の理解が社会に広がっていくことが大切だ。「エイズ」というと条件反射的に「撲滅」という言葉が出てきてしまうような状態に対しては、辛抱強くおかしいという指摘をつづけていかなければならない。

■閉会のあいさつ（特定非営利活動法人エイズ&ソサエティ研究会議 根岸昌功代表）

本日は非常に興味深い議論になったと思う。大阪のフォーラムでも同様に活発な意見交換が行われることを期待したい。HIV/エイズの問題が様々な立場の人の心に染み込んでいくようなテーマが決められたらよいと思う。

■最後に（公益財団法人エイズ予防財団 宮田一雄理事）

2回のフォーラムとAPI-Netでの意見募集を経て、6月にテーマ検討会議を開催し候補案を策定する予定。皆さんの意見をできるだけ吸収し、今年度どうするかを探りたい。本日は予想を超えて大勢の人にご参加いただけた。このような議論ができたことを心強く思う。